

2024年ブラジル研修旅行の報告

はじめに

小井沼眞樹子（日本基督教団隠退牧師）

2024年8月2日～22日、ラキネット主催によるブラジル研修旅行を実施しました。2015年に実施して以来、9年間のブランクを経ての再開でした。

参加者は川浦弥生さん（日本基督教団牧師）と長谷川りゑ子さん（林間つきみ野教会信徒・農村伝道神学校後援会実務委員）のお二人です。

今回研修された川浦さんは、実は2019年にブラジル研修をしたいと申し出ておられました。けれどもその後、全世界に新型コロナウイルスが蔓延し、実施が先延ばしになっていたのです。お二人とも、ラキネット前代表の大倉一郎さんの解放の神学の講義を農伝で受講された方たちです。この度、ブラジル研修旅行が再開されることが決まった時、大倉さんはたいそう喜ばれ、「21世紀のブラジルにおける解放の神学の実践と将来の展望を見てきてください」という餞別の言葉をくださいました。

そんな大きな課題を与えられて、言語力に限界のある小さな宣教師ではとても期待に応えられそうもないと判断し、ブラジリア・カルチャーセンターにいる友人のミゲル神父（イエズス会）に協力を仰ぎました。彼は大変親切にすぐに積極的な返事をくださり、エキュメニカルに神父や牧師たち、また青年たちに声をかけて対話集会を持とうと提案してくださったのです。そのことを川浦さんに伝えたところ、彼女も自身の課題である沖縄の歴史、文化、現在の問題についてパワーポイントを準備されました。

結果的に、そのプレゼンは行く先々で実施されることになり、長く沖縄に関わってこられた長谷川さんのお話も補充されて、期せずしてブラジルと沖縄の出会いと交流の旅が実現したのです。

旅路の詳細は以下の通りです。

① **サンパウロ**：8月2－5日

東洋人街、セー広場、カテドラル、日本移民史料館、サンパウロ福音教会の礼拝と昼食会、ベルボ聖書講座体験

② **オリンダ**：6－8日

歴史街、アルト.ダ.ボンダージ.メソジスト教会の祈祷会と教育活動、家庭訪問、レシーフェ中心点、ドン.エルデル.カマラ史料館

③ **ジョアン.ペソア**：9－11日

南米の最東岬、マリア.ガレーガさんの共同体の朝食会、マンダカル教会と教区本部の教会ミサ

④ **サルバドール**：12－15日

CESE、ペロウリンニョ、ヴァレリオ.シルヴァ合同長老教会、トリンダージ共同体

⑤ **ブラジリア**：16－18日

カルチャーセンターのミサ、解放の神学対話集会、ブラジリア.アライアンス教会のキラキラ会と礼拝

⑥ **イグアスの滝観光**：19－20日

貧しい人々は、幸いである、
神の国はあなたがたのものである。
今飢えている人々は、幸いである、
あなたがたは満たされる。
今泣いている人々は、幸いである、
あなたがたは笑うようになる。

（ルカによる福音書 6章 20 - 21 節）

ブラジルは私にとって沖縄移民の国です。沖縄では約5年に1回「世界のウチナンチュ大会」という集いがあり、大きく報道されていました。その名の通りに世界中に移住した沖縄出身の方たちとその2世、3世が本当に誇らしげに笑っている姿が新聞やテレビに映し出されていました。特に南米の移民、その2世、3世とは実際に知り合う機会がありました。料理を教えていただいたり、体験をお聞きすることがありました。ですから、今回の研修は「解放の神学」の現場を体験することはもちろんですが、「沖縄移民の国」であるブラジルを訪問したかったのです。沖縄出身の方に会えることを楽しみにしていました。現地にいるときは環境になんとか適応しスケジュールを無事に実施することで精一杯でしたが、日本に戻ってきてひと休みするうちにじわじわとブラジルの種が膨らんできました。芽を出すかどうか、どんな実になるのか、それは土を耕し水をやらなければ、まだわかりません。でも、ほんとうに「じわじわ」と心に温もりが与えられています。記憶を味わいつつ、今の時点で報告できることを報告したいと思います。

<サンパウロ 貧困と希望>

サンパウロの風景は奇妙です。坂の街ですが、高台から周囲を見ると、30階はあるかと思われる白い高層ビルがニョキニョキと群れています。すぐ隣にある丘の斜面には粗末な、でも精一杯揃えたような一階ずつ壁面の材料が異なる建物が、上へ横へと増築されてひしめいています。なんとなく森永のキャラメル粒の粒を思い出しました。サンパウロ2日目、眞樹子さんが「ひとりでは危なくて案内することはできない」というディープな地域を岡村淳さんが案内してくださいました。大きな坂道の両脇に屋台や商店が続くサンベント商店街や日本にかかわる商店街リベルダーヂの賑わいに圧倒され、大好きな市場（私はどの国に行っても必ず市場を訪れます）を歩いた後、サンパウロ大聖堂のまわりを歩いて、フェージョアーダを食べるレストランに行きました。奴隷の料理フェージョアーダは豚の捨てられてしまうような部分、内臓や耳や顔と豆を煮込んだ料理です。沖縄では豚は残すところはないと言われていて、耳も手も足も食べたので親しみを感じました。実際には正装したギャルソンがいて、お肉も立派な部分が入っていました。特別においしいごちそうかどうかは微妙ですが、なぜかまた食べたいと思えます。

でも、本音を言えば、大聖堂の周囲ではさすがに「怖い」と思いました。この気持ちはしっかり考えなければならぬものです。正直なことを言えば、寿の炊き出しと比べても比べることができないほど、人生で一度も見たことのない風景だったからです。このあともブラジル以外の各地で見る人間の姿なのですが、この衝撃のあと、少しずつ見なくなっていった自分を発見しました。そうやって自分を守りました。現実の悲惨さと自分の無力感のためにあまりにも苦痛だったからです。イエスは…おそらく似たような環境でそのようなひとり一人を死に至る最後まで慈しんで見ておられたのでし

よう。誰も見ようとしぬ人の名を呼んで、そばに引き寄せ、あるいは自ら近づきことばを与えられました。それは本当にとても難しいことだと知らされました。

眞樹子さんは座り込んだまま虚ろな目をした人の頭に手を置き祝福します。岡村さんが「感染症に気を付けて」言っているのを聞いて、ますます「私にはできない」と思いました。また、自分が日本で経済活動を少し軽んじていたことにも気付かされました。政治は大切だけれど経済にはあまり関心を持ってきませんでした。むしろあえて避けてきた、私たちの関心はそこではないと暗に貶めたとも言えます。高度経済成長とともに育った世代として、日本の経済の右肩上がり志向に辟易していたこともあるでしょう。そして、右肩上がりの経済「成長」は自然なことだと思込んでいます。たぶん私はいまだにその感覚です。大きな反省をしています。人間が人間として大切にされるためには、政治と経済と教育と文化、それらを切り離して考えることはできないでしょう。貧困の問題を考えずに聖書を読むなんて、ありえないことです。

眞樹子さんから、教皇フランシスコが「フランシスコの経済」という運動を始めているということを知りました。以下に記事の一部をコピーします。

2024年9月17日 (<https://mission.spaziospadoni.org/ja/pope-francis-and-the-economy-of-francis/>) 「この運動は、教皇フランシスコ主催の国際会議を受けて2019年に始まった取り組みである。この運動の目的は、友愛、連帯、環境への配慮の原則に触発され、より公正で持続可能で包括的な経済を促進することです。「フランシス・エコノミー」運動には、世界各地から若い経済学者、起業家、活動家が集まります。これらの若者たちは、現在の経済的および社会的課題に対処するために協力し、搾取と排除に基づく経済モデルを克服し、代わりに人間の尊厳と共通善を中心とした経済を推進することに尽力しています。」

サンパウロの郊外には、シゲ神父こと中ノ瀬重之神父が主催するベルボ聖書センターという学びの場があります。とても運の良いことに、年に10日間の聖書講座の初日に参加することができました。参加者は目を輝かせて、シゲ神父のアクティヴな、そして従来の教義とは異なる、民衆の立場から考える新しい解釈による旧約聖書の講義を受けていました。私の隣で眞樹子さんがニコニコしながら大学生みたいに参加していました。

<オランダ、ジョアン・ペソア 支えあいとぬくもり>

旅は始まったばかりです。ノルデスチ（北東部を指す言葉）という地方ではレシーフェという街に降り立ち、海沿いのオランダからアルト・ダ・ボンダージ教会の祈祷会に参加しました。Uberが坂道の細い道をどんどん上がっていきます。ここは貧しい地域で、野菜や服や中古の家電などを売る3畳くらいの小さな店が続いています。小井沼眞樹子さんが牧会されたメソジスト教会 (Igreja Metodista do Brasil) です。教会は円柱形で、壁はお魚と十字架のかたちにくり抜いたブロックでできていました。みんなで考えて、みんなで働いて作ったそうです。現在、少し宣教の方向が変わりつつあるなか、眞樹子さんと一緒に働いていたジャニさんやドリンニャさんはそのことを嘆きつつ、教会の在り方、貧しい人たちとともに生きる教会をしっかりと支える大切な役割を担っています。教会員や教会員のご家族の家を何件か訪問しました。ブロックで増築を繰り返したような建物が急勾配の道（ほとんど崖）沿いに建てられていました。少し平坦なところのお宅にも訪問しましたが、教会員さんの家は掃除されて清潔な印象でした。教会に来る方たちの生活意識というものを垣間見た気がし

ます。そして、夕方からは歌あり踊りありの祈祷会に参加し、教会の若者たちが私たち3人に祝祷をしてくれました。その後、ギター教室、空手教室を見学しました。私たちの訪問に合わせてそれらの教室の保護者の方たちを呼んでくださっていたので、懇談会では車座になって話を伺うことができました。子どもたちは学校では学べないことをここで学んでいるので、規律が身についたと仰っていました。公教育は期待に沿うほどには充実していないとのことでした。

オリンダを離れてジョアン・ペソアに移動しました。日本語にすると「ヨハネの人々」という名前の街です。マルーシさん、セビリーノさんのすばらしいお宅に泊めていただき、おいしいコーヒーを味わいました。コーヒーの作り方は秘密だそうです。こっそり台所を覗いたら、小さい鍋のようなもので作っていました。でも、よくわかりません。そもそもブラジルのコーヒーはどこでいただいてもおいしかったのです。そして、陽気なマリア・ガレーガさんを訪問し、その地区の共同体の活動に参加しました。ここも貧しい地域です。60人近くの子どものための日曜日の朝ご飯はパンとスイカです。マリアさんのカトリック教会はかつてのようなイエズス会による司牧はなくなり、今は礼拝もクリスマスもイースターも教区本部の教会に集まるようにとの方針になっていました。水色の小さな教会を見るマリアさんはとても寂しそうでした。眞樹子さんの考えでは「神父が減ったからではないかな」ということでした。世界中で同じ悩みがあるのは、なぜでしょうか。その反面、ブラジルではペンテコステ派が隆盛を極めているようです。日本でもスピリチュアル系の様々な営み、占いや自己啓発は今でも盛んです。なにかに頼りたい、支えられたいという願いは、物質によって解消したわけではありません。むしろ強くなっているのに、私たちは声を聴けていないのでしょうか。

マリアさんは私たちのために近所の人を集めて、持ち寄りの昼食会を計画してくれていました。教会に集えなくなったので、そのような機会を作っているのです。部屋で待っていると、一人の少女が静かに入ってきました。10歳のマリアさんの孫、アリーシです。アリーシ!この少女は私を魅了しました。足腰の悪い父親と二人、近所で暮らしています。きれいに洗濯されたTシャツを着て、ほほ笑む姿の中には気品と静けさと清潔感があります。将来は栄養士になりたいという彼女の夢は叶うのでしょうか。後日、マリアさんから眞樹子さんに「息子の手術が決まった、祈ってほしい」と連絡があったそうです。回復して仕事ができるようになりますように。

夜には本部のカトリック教会のミサに参加しました。200人くらいいたのでしょうか。礼拝はほとんど歌による賛美で、神父の甘い歌声に聞きほれてしまいました。最初から最後まで美しく構成されたミサで、ことばはわかりませんが、おそらく美しい世界観で満ちていたのでしょうか。ああ、これなら人がたくさん集まるわ・・・と半分皮肉を感じ、半分は勉強になりました。賜物を生かしていただくことは恵みです。前日にはもっと小さなカトリック教会、とはいえ100人弱のミサに参加しました。この時泊めていただいたマルーシさんとセビリーノさんが通う教会です。眞樹子さんが訪れるので、当番を変えて司式をされたセルジオ神父はやはり誠実そうなあたたかい声で語りました。ポルトガル語が理解できないのが残念でした。

<サルバドール 挑戦と喜び>

最も印象が強い街サルバドール、なんと「救い主」という名の街です。最初に訪れたのはCESEでした。*The Ecumenical Coordination of Service (Coordenadoria Ecumênica de Serviço: CESE) 1973年に6つの教会が設立した主に女性のための人権団体です。カトリック教会、ルーテル教会、独

立長老教会、聖公会、合同長老教会、バプテスト同盟教会が北東部を中心にブラジル全土における奉仕活動の促進、指導、支援、視察を行っています。ぜひHPをご覧ください。

(<https://www.cese.org.br/en/>) 私たちを迎えてくれたのはソーニャさんとビアンカさんです。二人とも牧師でした。私たちは沖縄の話をし、彼女たちは活動を紹介してくれました。上からの支援ではなく、女性たちが自分たちで企画したプロジェクト（手芸、工芸品製作など）をいろいろな視点から審査して支援するそうです。私が「教会はあなたたちを支えるか？」と質問したら「もちろん」と答えが返ってきました。時に脅迫をうけたり、身の危険を感じながらも、支援のネットワークを確実に積み上げている印象を受けました。教会は経済的な支援の役割を果たしているようです。ああ！やっぱり女性の連帯はすてきです！とても元気をもらいました。

ここサルバドールはアフリカから連れてこられた奴隷の売買をする街だったそうで、ホザーリオ・ドス・プレートス教会（黒人のロザリオの聖母第三教会）はブラジル初の黒人教会。水色のさわやかな前面、会堂には黒い皮膚のマリア像があります。黒人奴隷たちが少しずつ建てたそうです。司祭もアフリカ系の方でした。世界中から人が来るようで、最初に司祭が「皆さん、どこから来たの？」と問いかけると、あちこちからいろいろな国の名前が叫ばれました。私たちの後ろに座っていた男性は日本語が話せるので「日本人ですか？」と聞かれて会話していたせいか、その男性が大きな声で「Japan!」と叫ぶと、神父も「Japan!？」と応えました。アフリカ文化の影響が濃いと思われるミサは、この地域バイアの打楽器によって演奏されていて賛美歌も聖餐式も独特のものでした。特に聖餐式には目を見張りました。30人くらいの人がパンがいっぱい積まれた籠を、歌い踊りながら入場します。聖餐式には私たちも与りました。最後に全員にパンが配られます。みんな笑顔で心から満足した様子で教会を後にしていました。

聖餐式について言えば、ブラジルにいる間にカトリック教会で3回聖餐に与りました。ここサルバドールではこの教会とトリンダージ、ブラジリアではイエズス会のブラジリア・カルチャーセンターです。日本では、日本基督教団のメンバーは、教職、信徒にかかわらずほとんどのカトリック教会で聖餐に与れないという事実をどう理解するのでしょうか。おそらくなんらかの見解が出ているはずなので、調べようと思います。

14日はヴァレリオ・シルヴァ合同長老教会を訪問しました。ここもつい3年前まで眞樹子さんが牧会していた教会で、広大な貧困居住地の中にあります。私はFacebookでこの会堂とコミュニティセンターが建っていく様子を拝見しつつ、わずかですが献金をしました。かつて眞樹子さんと一緒に働いたタゴベルト牧師が遠方から来会し、教会員と一緒に歓迎集会と食事を準備して待っていただきました。牧師は平日仕事をもつことと決まっているそうです。教区主任の若い牧師さんが「経済的な問題だけではなく、社会人として生活することが牧師にとって必要だから」と話してくださいました。まったく同意できます。両方とも大切な問題です。アルバイトしている牧師と言ってバカにするなど、本当に視野が狭いと思っています。コミュニティセンターにはミシンの部屋があって、近隣の方のために裁縫教室を開いているそうで、手芸品や服がありました。献金のつもりでジャンパーパンツを買いました。

サルバドールの最後はトリンダージ共同体の訪問でした。ここは路上生活をしている人たちの共同生活の場です。廃墟同然だった教会を借りて、2000年から始まりました。広い会堂の中と外の建物が住居になっていました。主幹はフランス人のエンヒーキ修道士で、ほかにも数人の奉仕者が一緒に働

いていました。路上からすぐここに来るのではなくて、最初の場所でしばらく暮らして、共同生活が可能の人が来ることができるというシステムだそうです。それは大切なことだと思いました。薬物やアルコール依存症では治療が必要でしょうし、感情コントロールや暴力の問題もていねいに扱う必要があります。会堂の中で高齢の女性がベッドに寝ており、ひとりのシスターが寄り添っていました。食事の準備はそこで生活する人たちが整えています。あちこちに素朴な絵が掲げられていて、庭の花が飾られていました。夜になってセレブラソン（礼拝）の時間になりました。他の人たちと一緒に座っていたTシャツと短パンの高齢の男性が突然立ち上がると、司式を始めました。司祭だったので、ここで私たちも聖餐に与り、おいしいスープをみんなでいただきました。もしかしたら、このスープがブラジルで食べた料理のなかで一番おいしかったかもしれません！

参加者は60人くらいいたと思うのですが、このあと不思議な思いが浮かびました。私は続けて家族を失って以来、ずっと自分が「孤独でみじめだ」という考えに囚われていたのですが、ここに集う人たちと私は同じだと思いました。私には着るものも食べるものもあるけれど「本質は同じだ」と。思い通りにならない生を、それでも生きている。そして、それはネガティブなことではない、その「孤独でみじめ」な自分のままでいいんだ、生きるとはそういうことなんだ、と思えたのです。イエスに抱きとめられた、聖霊が働いたとしか思えません。すーっと楽になりました。ずっと拒否して否定してきた自分の「孤独」を受け入れることができました。「孤独」だけど、もうみじめではありません。

<ブラジリア 歴史のなかに生きる霊性>

ここブラジリアはブラジルの首都ですが、以前テレビで紹介されていたので、ここだけは少しイメージをもって行きました。でも、イエズス会の宿泊場所に泊まれるとは夢にも思いませんでした。イエズス会、カルチャーセンター主幹のミゲル神父と神父やブラザーが6～7人で朗らかに暮らしていました。私たちの前に来るといつも「(^_^♪サウダージ♪」と歌うお茶目なブラザーがいて<??あれは中森明菜の歌のポルトガル語バージョンではないか?!>と思ったのですが、聞きそびれました。ただ、政府機関などがある中央区の側に位置しているので、周囲には生活の匂いがまったくなくて、宇宙基地にでもいるかのようでした。センター内では一緒に食事をしながらお互いのことを話して、ミゲル神父の若い時の写真を見せていただいたりして、ほっとするひと時を過ごしました。楽しかったです。

夜にはミゲル神父が呼びかけてくださったエキュメニカルな神学対話集会をもつ機会に恵まれました。沖縄の話をするためにパワーポイントが使えなくて、口頭だけで説明するのはなかなか大変でした。写真や地図を使い、沖縄の歴史、基地問題を説明するために、パワーポイントにポルトガル語訳を表示していたからです。でも、ポケットクががんばりました。会場からもいろいろな活動の紹介があり、とても印象に残った言葉は難民問題を担っている方の言葉でした。

「殉死した人や犠牲者の霊性が私たちの活動を支えている」

ブラジルの歴史は映画の中でしか知らないけれど、軍政権の下で、また現在までも多くの犠牲者がいるブラジルでは、正義を実現することは命がけであることをここにいる人たち全員が知っているのです。忘れることのできない言葉です。また、貧困とたたかって支援をしている女性牧師は「わたしたちは独りではない」と連帯を訴えました。世界の現実は気落ちすることばかりですが、ここでもエンパワメントされました。

カルチャーセンターではミサにも参加し聖餐に与りました。そのあと、やっとパワーポイントを使

えることになり、沖縄の話もさせていただきました。これまで4回話をしたけれど、沖縄については場所も含めて知られていませんでした。独立国だったこと、日本に侵略されたこと、軍政の下で苦しんだこと、その時に教会が変わらざるをえなかったこと、今も軍事植民地の扱いであることを話しました。ある方は「自分たちも軍政下で暮らしたからわかる」と言いました。日本にはクリスチャンはどれくらいいるのか？と聞かれたので、日本では1%、沖縄はその3倍と答えたら沈黙が……。考えられないほど少ない数字なのでしょう。また、「中国との関係はどうなっているのか」という質問もありました。「今は中国、アメリカ、日本に翻弄されて苦しんでいる。日本政府は沖縄の人々に対して『中国が攻めてくる』と脅して、沖縄に基地を置いている」と答えると大きくうなずかれました。

土曜日は日系のブラジリア・アリアンサ教会の礼拝に参加し、礼拝後に高齢者の親睦会であるキラキラ会で沖縄の話もさせていただきました。この教会でやっと沖縄から移民してきた女性お二人と出会うことができました。話をしましたが、何十年離れていても、やっぱり話の仕方や振る舞いは沖縄の方だなあと嬉しくなりました。会の後の懇親会で、そのお一人が沖縄戦の体験を話してくださいました。「自分はケガをして座っていたら、米兵が来た。ああ、殺されるんだなと思ったら、ケガの手当てをしてくれて『家に帰れ』と言ったよ。優しいよ」と話してくださいました。私が「日本兵のほうがこわかったんですね？」と言うと黙ってうなずきました。発題の時には会場から「沖縄の人はなぜ長生きなんですか？」と質問が出ました。もうお一人の沖縄出身の方が「沖縄は家族を大切にしていって、みんなで助け合って暮らしているからです」と答えられました。お二人のおかげで、ひととき沖縄に帰ったような豊かな気持ちになりました。礼拝はブラジリアの最貧困地区で牧会をしている牧師が説教者として招かれた日でした。そこはゴミの集積場の中だそうです。今回は行きませんでした。が、大切な働きをしている教会だろうと思いました。

安井牧師の息子さんは日本語教室の先生です。「日本語を学んでいると就職などに有利なのですか？」と質問をしたら、「そういうことは特にありません。自分のアイデンティティのために日本語を学んでいます」という返答でした。とても大切なことを教えていただきました。沖縄の人たちが「言葉はアイデンティティなのだ」といつも言っていたことを思い出しました。その後、アリアンサ教会の安井牧師がブラジリアを案内してくださいました。全体的に直線的だからか、大きすぎるからか、やっぱり宇宙基地みたいな街で緊張しました。うまく言えませんが、間合いとか隙とか無駄というものは安らぎにとって必要ですね。

このあとイグアスの滝と南米のダンスショーを見せていただきました。たくさんプログラムを準備していただき、多くの方の協力によって研修は本当にスムーズにすすみました。今も日々、次から次へと「そういえば、あんなこともあったな」と記憶が思い浮かびます。ブラジルでは教会は基礎共同体として人格を陶冶し、教育の場、生活習慣を学ぶ場、ことばを学ぶ場というように、人間が生きるために必要不可欠な場所であると思いました。課題の大きさは果てしなく、成果は心もとないくらい小さいように見えますが、それでも諦めることなく自分たちにできることをやっている姿は世界中に存在するのです。ルカ福音書の言葉のように、私たちはなにをもってして「幸い」と言えるのでしょうか。日本は……？と気が遠くなるような問いがまた生まれます。貧困の問題は今や他人事ではなくなりました。これからどうしようかと思いつつ、じっくりとこの体験を味わいたいと思います。

アルト・ダ・ボンダージ教会の祈祷会で

アカペラ、楽器、様々な音楽グループの完成度の高い発表のように始まった祈祷会のなかで、私と川浦弥生さんも「沖縄の歴史と教会」について映像を使い琉球処分、沖縄戦の歴史をポケットークを使って話した。映像の文字はポルトガル語。平良修牧師がフェルディナンド・T・アンガー第5代高等弁務官就任式に祈祷牧師として招かれ祈った祈りを会衆に交替で読んでもらった。熱心に沖縄の映像を観て聴いていただいた。そのあとタンバリンや鈴でみなでリズムカルに踊り、私たちも立って輪になった。そしてアジガルド牧師に祈祷と祝福をいただいた。

大勢集まっていた子どもたちはポケットークを使って私たちと話しスマホで写真を撮り合い、農村伝道神学校（農伝）の竹コマで遊んでくれた。

翌日の午後、ジャニさんとドリンニャさん案内でアルト教会地区の保育園と、教会員の家庭を訪問した。雑然と片付けられていないお家に小さい女の子とお母さんがいたが、教会に来ていない家庭とのことだった。それでも農伝の竹コマがテーブルの上であり、女の子がコマを回し、お母さんもコマを逆さまにして器用に回してくれた。

（後日、その2、その3、4、5、6…が随時掲載される予定）

おわりに

今回の旅行で、貧しい人たちの教会と周辺状況がコロナ禍の後、さら困難になっていることを知りました。オランダのアルト・ダ・ボンダージ地区ではコロナ後、以前にも増して犯罪が多発するようになったとのこと。職を失い空腹を満たすために麻薬売買に手を染める人が増えたためだそうです。前は訪問できた家庭に、今回は危ないから行かれないと制されました。また、ジョアン・ペソアのマリア・ガレーガさんの居住区では、いくつかの小さな教会に神父はミサをたてに来てくれず、司牧もなくなり寂しいと嘆いていました。弱く小さな共同体が見捨てられつつあります。そんな厳しい生活環境の中で、力を合わせて助け合い、より困難な隣人に奉仕している人々の姿や好奇心いっぱいの元気な子どもたちに出会えて、そこに生きて共におられる主イエスを感じたのでした。

最後のブラジルでのエキュメニカル対話集会では、聖職者や信徒を含めて18名の参加者があり、現場の分かち合いと意見交換をポケットーク（通訳アプリ）に頼りながら果たしました。

解放の神学は殉教者たちの霊性に支えられて歩んでいる、難民や先住民の人間としての尊厳回復のために解放の神学の実践が今後も不可欠だと熱っぽく語る神父（あるいは牧師）の発言に、大変励まされました。皆さんが沖縄の話を熱心に聴いてくださり、文化の異なる国のキリスト教会に関心を持たれたようでした。最後に会場を提供してくださった聖公会のカテドラルで働く女性司祭（彼女は主教だそうです）は、ブラジルでも貧しい人たちが増えているが、教会で待っていても彼らは中に入っていない。出かけて行って人々と出会い、必要な手を差し伸べていると具体的に話されました。

言葉や行動の限界のなかで、今回の研修旅行に課せられた課題をなんとか果たせたように思います。長い道中、病気や怪我もなく、旅路の安全が守られたことをここから感謝しています。

（小井沼記）